



ぶらり神戸第 21 号

令和 3 年 6 月

「織田信長に一矢報いた淡河氏」
おうご

第 4 号で戦国の世に関して、「羽柴秀吉の三木合戦と神戸市北区」を取り上げました。その三木合戦の中で淡河城の存在は重要であることを紹介しました。

今回は、その淡河城・淡河氏について、もう少し詳しくみていきたいと思います。天正 7（1579）年 5 月 27 日、総大将羽柴秀長、武将は浅野弾正長政、有馬法印則頼らが、5 百余騎馬で攻め寄せました。対する淡河城主淡河弾正少輔定範は、一族郎党 5, 60 人、足軽 300 人を率いて普請を開始しました。同時に牝馬 1 頭 300 文の触を出しました。奇策として、外曲輪には無数の菱が撒かれ、城内からは集めていた牝馬を一斉に放ち、寄せ手の牡馬が悉く乱れ、この機に乗じて攻めかかり、秀吉勢は大敗を喫したのであります。この模様は三木市法界寺に残る「三木合戦絵図」に描かれています。淡河城主淡河弾正少輔定範は、秀吉が大軍で攻めてくることを予想し、全員が三木城に入って戦うことを決意し、淡河城に火を放ちます。この戦いの様子は、『播州太平記』『別所記』『絵本太閤記』などに記されています。天下に名高い“三木の干殺し”（天正 6（1578）年 3 月から天正 8（1580）年 1 月別所長治自刃）にまつわる戦いがこの北区で繰り広げられたのは、感慨深いものがあります。

